

身近なまちの風景物語(7)

しつら
迎える設い

かつての旅行は「非日常」を楽しんだが、最近のまち歩きは「異日常」を楽しんでいる。

近年は2月になると、ひなまつりの行事をイベント化した催しが全国各地で行われている。店舗や公共施設にひな人形が飾られ、それらを見て廻るまち歩きの様相である。

茨城県内でも雛まつり、雛巡り、ひなあかり、ひな流しなど、それぞれに特色を持たせ、趣向を凝らした内容になっている。

ただ桜川市真壁で毎年行われているひなまつりは、他とは少し異なっている。特徴的なのは、小さなまちの中に150余りもの参加があり、このうち20余りは個人住宅が参加していることである。

道路に面した出窓にひっそりと置かれている小さくかわいいひな人形もあれば、軒先に堂々と置かれたひな人形や静かな玄関内に置かれた厳かなひな壇飾りもある。

個人住宅の場合、ひな人形を見るためには、その敷地内に入り込むことになる。つまり私有地に足を踏み入れるのである。この期間は、プライベートな空間を外部の人間に開放しているのだ。

古い商家では江戸時代や明治時代などの歴代のひな人形が並べられていることがある。その空間に居合わせると、その家に受け継がれている暮らしの歴史を感じることができる。

一方、現代的な家屋には最近のひな人形が見られる。そこからは、その家に女の子が誕生したであろう家族の履歴が見て取れる。

たしかに古い建物が多く残り、まち並みが守られているまちに、伝統的な行事は似合う。ただし真壁のひなまつりの魅力はそれだけではない。一般の家庭も多く参加していることである。

そこが新しい民家でも良い。まち全体でひなまつりを祝い、まち全体で来街者を出迎えている。そうした姿勢がうれしい。

店舗や住宅などには、手づくりのひな飾りや吊し雛なども飾り付けられている。訪れる者を出迎えるために、もてなしの空間がそれぞれに工夫されている。しかも長い時間をかけて準備されていることがわかる。

そうした設い^{しつら}に手招きされるように、自然と歩が進む。寒風を忘れ、胸がホッコリする。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群3年）